

## 傳薬師如來・獅子吼菩薩立像実測調査概要

美術工芸研究室

唐招提寺所藏の伝薬師如來立像、伝獅子吼菩薩立像、伝衆寶王菩薩立像（以下、薬師、獅子吼、衆寶王と略称）の3軀は、その共通した独特な作風によってよく知られている像であるが、とくにこれらが類例の少ない豊かな素材と、特色ある量感を示した一本彫成像として注目される。そこで、このたび前2像の実測調査を試みたので、その実測結果と検知した素材性の若干についてふれておきたい。

実測方法は像の正側2面に高さ2.4m、巾1.5m、厚さ15cmの方形枠を設定し、その枠面にあらかじめ前後2重に張った2.5cm方眼グリットを透視して像面を把握するいわゆるグリット投影図法によった。像の正面の決定は像の正中線を基準に、枠の正中グリット及び別に枠と像との間に垂らしたさげぶりとを同時に見透して定めた。

その結果、第1・2図のような両像の正側2面の実物大原図を作製することができた。実測図の表現は像容の輪郭・稜線を実線に、また

稜谷線でも鈍く自然に消える部分は破線に、亀裂線（干割れ）の主なものなどはやゝ細い実線で示し、さらに原図では正面図に木目の主なもの適宜朱線によつて図示した（第1・2図の正面図）。原図における誤差は断定はできないけれども、透視あるいは表現上の誤差を考慮しても、グリット交点では1~2mm内、その他の点でも2~3mm内外で

おさえられるものとみられる。（第1・2図のグリットは10cm単位）

以下、実測図を通じて両像の素材の規模、木取り方法、性状について略述する（なお必要に応じて衆寶王についてもふれる）。

一、素材の規模 両像は桧材の芯去り邊材を用いた一本彫成像であるが、いずれも像、蓮肉、同軸部と共に総長（総高）233.5・202.5cm、巾（肘張）55.6・54.2cm、奥行（蓮肉前後径）39.5・37.0cm

（以上、前者が薬師、後者が獅子吼）の一材から彫出している。また各像は後述のように辺材の木表から木心方向に彫出しているので、素材の奥行はほど蓮肉前後径に相当し、これに各々の木心距離（O→P）を加えれば、原材における半径を復原的に推定できる（第3図）。したがって、両像の原材は少くとも直径94~120cm前後の巨材であったものと考えられる。

なお、実測図（第1・2図）では蓮華座軸部の受座以下は図示されていない。図示されない軸部は薬師では受座からさりにそれを載せる箱座に約23cm貫通し、その先端は圓形に切り込まれて、この部分が箱座内部の仕切り板くい込んでいる。一方、獅子吼の軸部は受座の中央孔深さ5.3cmで終り、その先端には枘孔がうがたれて、こゝに逆に受座下の框座から出る枘がくい込んでいる。いずれも受座以下の修補跡

衆魔王 ( $O_3 \sim P_3$  7cm) の順となつてゐる。この木芯位置の差異は樹幹の上下、あるいは樹幹の異同によるものか容易に断定できないが、後述の年輪密度（第1表）を考慮に入れると少くとも衆魔王の原材料の樹幹は比較的高い位置のように推測できる。またこの木芯位置の差異は像の現状における細かな干割れの方向の違いとなって現われている。たとえば衆魔王の蓮肉上面の干割れ方向が、他に比較して著しく蓮肉中心方向に入り込んでいることによつても容易に背けよう（第3図）。

次に、像の正中線と木芯方向との関係についてみると、薬師、衆魔王ではそれら両軸がほど一致しているのに対し、獅子吼においては正中線が木芯方向からやゝ左寄りに外れているのが注意をひく。これは像の正面に現われている木目の位置とも関係して、薬師、衆魔王においては正中線を軸にほど対称的な位置に木目が現われている（第1図）が、獅子吼では主として正中線の右側、すなわち左頬や左胸など左半身に偏して現われているの

第1図 伝薬師如来立像実測図

像高 174.5cm 髪際高 152.3cm

における処置とみられる。

二、木取り 両像の原材料における木取りを断面（蓮肉上面）にて摸式的に図示したのが第3図である。さきにも述べたように各像の断面の木取りは、いずれも像正面を木表方向に向ける。いゝかえれば像は辺材の木表から木芯方向に彫出している。この場合、原材料における木芯位置は薬師が最も離れ ( $O_1 \sim P_1$  23cm)、次いで獅子吼 ( $O_2 \sim P_2$  10cm)、

この木芯位置の差異は像の現状における細かな干割れの方向の違いとなって現われている。たとえば衆魔王の蓮肉上面の干割れ方向が、他に比較して著しく蓮肉中心方向に入り込んでいることによつても容易に背けよう（第3図）。

次に、像の正中線と木芯方向との関係についてみると、薬師、衆魔王ではそれら両軸がほど一致しているのに対し、獅子吼においては正中線が木芯方向からやゝ左寄りに外れているのが注意をひく。これは像の正面に現われている木目の位置とも関係して、薬師、衆魔王においては正中線を軸にほど対称的な位置に木目が現われている（第1図）が、獅子吼では主として正中線の右側、すなわち左頬や左胸など左半身に偏して現われているの

が確かめられる(第2図)。

このような原材料における木取り方法、すなわち像の正中線と木芯方向との関係や、木目の布局とその効果などは、のちにふれる素材の年輪密度の精粗とともに、造像過程における作者の意識的な配慮と選択

によって決まるものと考えられるが、その意味では薬師における木目の布局と左右均齊な量感表現とは、すでに木取り段階において十分に配慮されていたものといえよう。また一方獅子吼における木目位置の若干の差異は、像自体の微妙な腰のひねり、すなわち上半身における左胸にかかる動きや、下半身、

ことに左脚をやゝ後方に引いている(第2図)動態との関係で検討する必要があろう。

次に、両像の立面における像容の木取りをみると、そこには素材の垂直性が著しく支配していることが確かめられる。すなわち両像の正側両面における中心軸は、実測図に明示される通りいずれも頂中心から蓮華座軸部に垂下して、しかも正側いずれも中心線(正中線)を軸にあることはほど左右対称的に(正面)、または前後均衡を保つよう(側面)各部が構成されている。たとえば、ほど対称的な像容をとる正面では、両像ともに蓮肉径にこだわらずに肩部 大腿部な

第2図 伝獅子吼菩薩立像実測図

どを大きく膨出し、量感ある安定した構成をとるが、一方対称でない側面では、各部を中心軸に合わせて均衡を保ち、さらに各部いずれも下端の蓮肉径以上に出ることを避けるほか、両足を蓮肉上やゝ前寄りに位置させるなど、各々の中心軸の垂直性に払つて造形的な配慮は注意されなければならない。

このよう兩像の立面的な木取りの基本としては、素材の垂直性に順応したあくまで垂直的な中心線の配慮と、それに相応する像容の対称性あるいは均衡性が重視されているとみられるが、このことは單

第3図 断面木取図

三、素材の性状  
各像の年輪密度を蓮実  
珠部分（第3図）で検  
知したのが第1表であ

位置 数値 名称	a			b			c			平均年輪 密度/1cm
	年輪数	単位 cm	密度 /1cm	年輪数	単位 cm	密度 /1cm	年輪数	単位 cm	密度 /1cm	
伝薬師	31	4.6	6.5	32	4.4	7.3	28	4.1	6.8	6.8
獅子吼	17	3.8	4.5	11	3.1	3.5	19	2.6	7.3	5.1
衆宝王	47	3.6	13.1	21	3.6	5.8	30	3.6	8.3	9.1

第1表 年輪表

る。像により部分によつて若干の精粗はあるが、平均して5~9という緻密な木理であるほか、年輪幅も一様で整然としており、いわば目の通つた糸柾の性状に近い良質の辺材が厳選されている。

また、各素材のいわゆる樹脂抜きの程度もきわめて良好で、観察の限りでは樹脂の酸化によるいわゆる褐変はほとんど見られず、木肌は現状においてもやゝ赤みを帯びた黄白色を呈し、いわば理想的な白太材（辺材）の性状を示している。これはたとえば同寺所蔵の伝自在菩薩立像などとは著しく相異するとろで、彼らが伐採後おいていかに樹脂抜きが適切であったかまたいかに入念な素材の厳選が行われたかをおのづから示している。

以上、兩像の実測結果とそのすぐれた素材性について略述した。なおこれらと不可分な関係で兩像の造形性について詳述されねばならないが、それについては別の機会に譲りたい。

（長谷川 誠